

蒲生慶一さんが入学したころの 一橋大学大学院の学問的雰囲気 ——新しい政治経済学の躍動の時代——

植村 博恭

UEMURA Hiroyasu

横浜国立大学名誉教授

Yokohama National University, Professor Emeritus

Quadrante, No.24 (2022), p.30.

私が蒲生慶一さんと初めてお会いしたのは、おそらく1991年、一橋大学大学院高須賀義博教授・都留康助教授のゼミナールであったと思います。私は、1986年に大学院を終え、すでに茨城大学助教授となっていました。古巣の一橋に久しぶりに立ち寄ったのだと記憶しています。そのとき、蒲生さんはこれまでのご自身の研究を発表され、特に私も翻訳に携わったハワード・シャーマンの『マクロ経済学』における利潤率の要因分解の定式化を紹介されていました。利潤率の変動を基礎に現実の資本主義経済の動態を分析するという研究手法は、当時の政治経済学の統計的分析の主流になっていました。現代経済学の手法を用いて、マルクスの問題意識を発展させるという方法は、当時の一橋大学大学院、特に高須賀義博先生の研究グループの中心的アプローチだったのです。

1980年代中葉から後半にかけては、すでにアメリカでは、デビット・ゴードンを中心に「社会的蓄積構造 (SSA) 理論」が発展し、サミュエル・ボウルズ／デビッド・ゴードン／トマス・ワイスコフらによって『アメリカ衰退の経済学 (原題：荒れ地を超えて)』(都留康／磯谷明德訳)も出版され、この本でもアメリカ経済における利潤率の長期的変動と収益性危機が分析されて、その背後にある社会的蓄積構造の変化について深い分析がなされていました。その後、このような新しい政治経済学は、フランスで形成された「レギュレーション理論」のフォーディズ

ム分析とも連携をとって発展していきます。

一橋大学大学院は、このような新しい政治経済学の躍動を生み出していました。ちょうどその時期に、蒲生さんは大学院に入学していらっしゃいました。そして、当時の研究環境としてさらに言及すべきは、アメリカ経済研究の大きな発展です。一橋大学経済研究所では、佐藤定幸教授や平井規之教授の研究によってアメリカ経済の実証研究が大きく発展していました。このように思い出を語ってみると、一貫してアメリカ経済の所得分配、生産性、収益性を分析してきた蒲生さんが大学院でその研究をスタートさせたころの一橋大学大学院の研究環境を、ご理解いただけるのではないかと思います。

もうあれから30年以上が経ちました。その間、冷戦の終焉を経験し、そしていま米中の経済覇権の変動などが進んでいます。現実は大きく変化してきましたが、現代経済学の手法を用いて、マルクスやケインズの制度・歴史的な問題意識を発展させるという当時の一橋大学大学院の政治経済学の方法は、現在でもその有効性が失われていないように思われます。